

次世代、子孫へとお寶（たから）を授け返していくこと

間もなく今年も終わろうとしている。一年を振り返り、そして今までの自分の仕事や職業について振り返ってみる。

40年の職業人としての歩み、先代社長である父が他界したあと24年間社長として働いた日々は、その殆どを「失敗の連続」で過ごしてきたことを思い返している。

葬祭業という職業は「習俗」、「その土地、その土地の、習わし」と「宗教儀礼」との間でご遺族の意向をくみ取りながら様々なことをわずか2、3日の間で決め、また一回決めたことでも毎日変化していくという特殊な職業である。

お預かりした遺影写真をお届けすると、元気でいらっしゃる故人様の妹さんと間違えていたことが判明し作り直したこと。霊柩車の出棺の時間に遅れてご遺族にご迷惑をおかけしたこと。用意した棺のサイズが故人様のお体より小さくて、お通夜の最中に交換したこと、お寺の住職に叱られたことなど、失敗の経験は数え上げればきりが無い。そしてその経験こそが今の小生の職業に対する取り組みの骨髄になっていると考えるところである。

「寶（たから）」という言葉がある。寶と聞けば大方の人は財産、金銭、高価なものなど自己自利的な一過性の物を想像するのではなかろうか。しかし、本当の「お寶（たから）」は生命、恩恵、愛情、知恵、ご加護といった様々な「お寶」であり、すべての人々が先人、祖先、両親そして神仏より戴けるかけがえの無い尊いもので、そして、戴いたものは返すのが世の常。次世代、子孫へとお寶を授け返していくことが大切なのだと思う。

葬儀という職業を通じて社会に奉仕する。

その中で100年前も100年後も大切にしなければならないことは、命をおくるご家族が、「次世代、子孫へとお寶を授け返していくこと」を実感できるお見送りが出来るようにお手伝いする配慮。そして、「ご遺族の声に出さない心」をどれだけ察してくみ取り形にできるか、そのホスピタリティーを実践できるかではなかろうか。

近年、簡素化、簡略化が加速度を増す葬儀事情の中で、「お葬式を通じてそこから始まるご家族の歴史」にも配慮できる奉仕に徹し、来年も自らの魂を磨いていきたいと思う。